

れる述語として (i) 「有」、(ii) 出現動詞 (verbs of (dis) appearance)、(iii) 場所動詞 (location verb)、および (iv) 経験の存在を表す [V-過] を挙げている。

(i) 述語が「有」である場合

(2) 桌上 有 一本書。

Table-on have a Cl book

'There is a book on the desk.'

(ii) 述語が出現動詞である場合

(3) 街上 來 了一個叫化子。

Street-on come Perf a Cl beggar

'There appears a beggar on the street.'

(iii) 述語が場所動詞である場合

(4) 牆上 掛 著 一幅畫。

Wall-on hang DUR a Cl picture

'There is a picture on the wall.'

(iv) 述語が経験の存在を表す [V-過] である場合

(5) 我 教 過 一個孩子很 聰明。

I teach Exp a Cl kid very clever.

'I have taught a kid, who was very clever.'

Huang (1987) では考察されていないが、「有」存在文と異なる特性を持つ存在文として「在」存在文がある。

(6) a. 桌上 有 書。

Table-on have {a book/ books}

'There {is a book/ are books} on the desk.'

b. 書 在 桌上。

{A book/ books} at table-on

'The {book is/ books are} on the desk.'

(6a) では、文頭に場所句「桌上」があり、述語「有」の後に生起する裸名詞句「書」は不定名詞句である。一方、(6b) では文頭に裸名詞句「書」があり、述語「在」の後に場所句が生起する。

Huang が考察しなかった「在」存在文を含めると、中国語の存在文には五つのタイプがある。本論では、まずアスペクト標識が現れない「有」存在文とそれに対応する「在」存在文について考察する。次にアスペクト標識が現れる存在文について論じる。出現動詞の存在文にはアスペクト標識の「了」があり、場所動詞の存在文には「著」または「了」があり、さらに経験を表す存在文には「過」がある。それぞれのアスペクト標識と各動詞の事象性、およびその選択関係について論じる。さらに、存在文に生起する叙述構造 NP-XP と主要述語の事象性の関連を統語構造の点から分析する。

第2章 「有」存在文と「在」存在文の叙述関係について

2.1 「有」と「在」の統語的用法

「有」にはいくつか用法があるが、アスペクト標識を含まない存在文に現れる述語「有」は助動詞の用法である。それは、(i) A-not-A 疑問文と否定文に生起すること、(ii) 主語は「有」との間に選択関係がなく、むしろ「有」の補部にある述語との間に選択関係をもつこと、(iii) 相の標識「過」、「了」、

「著」と共起しないことに示される。

「有」存在文には、文頭が空の場合 (7) と、文頭に場所・時間を表す名詞句が現れる場合 (8) がある。

(7) a. 有一本書在桌上。

Have a Cl book on the table

'There is a book on the desk.'

b. [_{IP} e [_I 有 [_{VP} 一本書在桌上]]]

(8) a. 廚房裡有一鍋燉肉在爐子上。

In the kitchen have a Cl stew on the stove

'There is a pot of stew on the stove in the kitchen.'

b. 昨天有一件搶案發生在中午12點。

Yesterday have a Cl robbery happened at 12 o'clock

'There happened a robbery at 12 o'clock yesterday.'

(7a) は (7b) の構造をもち、Huang (1988) と Tsai (2004) は、「有」は助動詞であり、動詞句を補部とすると論じている。(8) のように一つの文に場所を表す要素が2つ現れる事例は、中国語だけでなく英語にも存在する。

(9) This box_i had books in it_i. (Brunson and Cowper, 1992)

Brunson and Cowper は照応形 *it* が統語上の先行詞 'this box' に束縛されると同時に、'this box' の意味役割の解釈が 'it' の位置によって得られるとし、この束縛現象を双方向的な役割束縛 (role-bind) によって説明している。

さらに、「有」存在文と CP を補部にとる動詞「知道」(know) および「知道」の意味に類似するが DP を補部にとる動詞「認識」(know, get acquainted with) との共起可能性によって、その範疇は CP であることが示される。

(10)a. 我知道? (有) 一個人很欣賞 Paul Klee 的作品。

I know? (have) a Cl person very admire Paul Klee's drawings.

'I know there is someone who admires Paul Klee's drawings.'

b. 我知道這些年來有一個人很欣賞 Paul Klee 的作品。

I know for years have a Cl person very admire Paul Klee's drawings

'I know for years there has been someone who admires Paul Klee's drawings.'

(11) a. 我認識

I got acquainted with

(?有) 一個人很欣賞 Paul Klee 的作品。

(?have) a Cl person very admire Paul Klee's drawings

'I got acquainted with someone who admires Paul Klee's drawings.'

b. *我認識

I got acquainted with

這些年來一個人很欣賞 Paul Klee 的作品。

for years a Cl person very admire Paul Klee's drawings

* 'I got acquainted for years with someone who admires Paul Klee's drawings.'

(10a) では「知道」の補部に「有」がない場合、文は不適格になる。それに対して、(11a) では「認識」の補部に「有」がある場合、文は不適格になる。すなわち「知道」は文を補部とすることができる

が、「認識」は文を補部としない。また補部に時間表現が生起する場合、(10b)では「知道」の補部はCPであるが、(11b)では「認識」がCPを補部とせずDPを補部にすることを示している。すなわち「有」存在文の主語は「有」の補部に現れ、「有」の補部は存在閉包 (existential closure) を受けることを示している。

次に「在」存在文を見る。「在」は助動詞の用法と前置詞的用法がある。「在」が助動詞として用いられる場合は、動作の進行や状態の持続を表す。一方、「在」が前置詞的に用いられる場合、軽動詞 v_ϕ に併合される。いずれの場合にも文頭には名詞句が現れる。

(12) 我在讀 一本小説 / 你的報告。

I AT read a novel / your report.

'I am reading a novel / your report.'

(13) 我在忙。

I AT busy

'I am busy.'

(14) [CP 我 [TP 剛剛 在 房裡]]

I just now in room

'I was in the room just now.'

(12)、(13)は助動詞としての「在」が現れる例であり、(12)は動作の進行を表し、(13)は状態の持続を表す。(14)の「在」は前置詞的に用いられている。ただし、「在」の文頭に不定名詞句は生起しない。

(14)のように、TPに付加する時間副詞「剛剛」が「我」の後に現れることは、「我」が主語より上位の主題の位置にあることを示している。また、この場合の「在」は前置詞的であるが、動詞として振る舞うと考えられる。その理由は、時制の連鎖に時制演算子 (TO)、 T^0 、動詞に加えて、事象役割 (*e*-role) が一つ含まれ、その *e*-role が語彙内容 (lexical content) によって読み取られるという T 連鎖分析 (Guerón and Hoekstra, 1995) に従って、「在」が抽象的な動詞 V_ϕ に編入するためである。

T 連鎖の概念は「有」存在文でも重要な働きをする。「有」存在文では、「有」に後続する NP の後に述語 XP が生起することがあるが、この XP が生起することは T 連鎖によって説明される。

(15) [CP TO [TP ϕ [ASpP 有 [vP 一場球賽; v_ϕ [AP t_i 很精采]]]]]

ϕ Have a Cl ball game very great

述語「很精采」によって「一場球賽」は相の情報が得られる。その vP は核作用域 (nuclear scope) であり、存在数量詞「有」の作用域になる。また、[Spec, CP] には音声形態をもつ要素か空演算子 Op が生起可能で、文全体が Op の核作用域となる。

2.2 単純判断と複合判断

英語の存在文では、(16a) が示すように、名詞句の定性効果が観察される。一方、中国語の「有」存在文においては、(16b) が示すように、英語の存在文と同様な定性効果は観察されない。

(16)a. There is {*the man / a man} in my class.

b. 屋裡 有 小華。

Room-in have Xiaohua

Lit. 'There is Xiaohua in the room.'

- (17)a. 桌上 有 書。
 Table-on have {a book/ books}
 'There {is a book/ are books} on the desk.'
- b. 書 在 桌上。
 {A book/ books} at table-on
 'The {book is/ books are} on the desk.'
- c. 桌上 有 {一本書 / *戦争與和平} 很 厚。
 Table-on have a CI book / War and Peace} very thick
 Lit. 'On the desk there is {a book / *War and Peace} , which is thick.'

(16a) では定名詞句 the man が現れないが、(16b) では定名詞句「小華」の生起が可能である。また (17) の裸名詞「書」の場合、その解釈は新情報と旧情報の違いによって区別される。(17a) の「有」存在文では、不定名詞句として解釈されるが、(17b) の「在」存在文では、定名詞句として解釈される。上記の例に示したように、英語では名詞句の不・不定の違いを冠詞の違いで表すが、中国語では冠詞のような統語的標示が用いられない。ただし、中国語の「有」存在文においても、定性効果が見られる場合がある。すなわち、(17c) が示すように、名詞句の後に述語が生起する場合、「有」の後に固有名詞が現れないが、この現象には情報構造の要因が関わっている。

その情報構造の要因は、Kuroda (1972) が日本語の「は」と「が」の分布を説明するために用いた単純判断 (thetic judgment) ・複合判断 (categorical judgment) の概念によって捉えることができる。

- (18)a. 犬が猫を追いかけている。
 'There is a dog chasing a cat '
- b. 犬は猫を追いかけている。
 'The dog is chasing a cat.'
- (19)a. 有 一本書在 桌上。
 Have A CI book at table-on
 'There is a book on the desk.'
- b. { *一 / 那 } 本 書 在 桌上。
 { *A / That } CI book at table-on
 Lit. '{A/ That} book is on the desk.'

(18a) の「追いかけている」のような単純現在形ではない述語が用いられると、その判断も全称的 (generic) ではなく、この判断形式は単純判断と呼ばれる。すなわち話者の関心は出来事全体に向いており、出来事はまるごと提示される。それに対して、(18b) では個体の犬の存在が前提にされており、話者はその前提とされている犬に対して「猫を追いかけている」という叙述を行っている。この判断形式は複合判断と呼ばれる。

このように単純判断・複合判断の概念に基づいて分析すると、「有」存在文では、(19a) に示すように叙述関係の主語は「有」の作用域内にあり、文全体は単純判断であり、節は記述 (description) である。「有」は存在数量詞であり、補部にある節は「有」の作用域となる。一方、「在」存在文では、主語が「在」より高い位置に生起し、後続する部分は主語に対する叙述を行う。したがって、(19b) に示すように文頭の名詞句は話題になるので不定名詞句は生起しない。この判断形式は複合判断であり、文自体は「話題－評言」の形式である。

第3章 中国語存在文におけるアスペクト標識

序論で触れたように、アスペクト標識が現れる存在文には出現動詞の存在文があり、共起するアスペクト標識は「了」である。場所動詞の存在文には「著」または「了」が生起し、さらに経験を表す存在文には「過」が生起する。

アスペクトについて Smith (1991) は、[± perfective] という視点のアスペクト (viewpoint aspect) と、活動 (activity)、到達 (achievement)、達成 (accomplish-ment)、状態 (state) の状況タイプ (situation type) の相互作用に基づく分析を提案した。Smith の分析を踏まえ、Klein (2000) は、アスペクト標識は文の事象の特定の部分について断定 (assert) する機能をもつとしている。さらに、テンスとアスペクトは状況時 (time of situation, (T-SIT))、話題時 (topic time, (TT)) および発話時 (time of utterance, (TU)) によって決定される。T-SIT と TT でアスペクトの解釈が得られ、TT と TU でテンスの解釈が得られる。アスペクトに関しては、(i) 非完結相の場合には TT が T-SIT に完全に包含され、(ii) 完結相の場合は、T-SIT が TT に完全にまたは不完全に含まれ、(iii) 完了形の場合は TT が T-SIT の後に配置されるとしている。以上の3つのアスペクトは、次のように示すことができる。

- (20) a. 非完結相 ++++++ [++++++] ++++++
 b. 完結相 ++++++ [++++++]
 c. 完了形 ++++++ [] (T-SIT:+++; TT: [])

さらに、Klein は、語彙のどの内容が具現化されるのかに応じて、動詞を1フェーズ (1-phase) 動詞と2フェーズ (2-phase) 動詞に分類する。この分類によると、1フェーズ動詞は始点と終点を持ち、2フェーズ動詞は起点フェーズ (source phase) と目標フェーズ (target phase) を含む。話題時と関係が付けられるのは際立つフェーズ (distinguished phase) であって、2フェーズ述語の場合、英語では起点フェーズが際立つフェーズとなるのに対して、中国語で目標フェーズが際立つフェーズとなる。

3.1 具現相標識の「了」

存在文に現れる「了」は動詞と結びついた形式に表される。本論では、「了」を具現化演算子と考える。(cf. Lin, 2003; Bohmeyer and Swift, 2001) また、アスペクト標識は事象の特定の側面を具現化するものと仮定する。(cf. Klein, 2000) それに基づき、どの側面が際立つフェーズになるかに応じて、完了相、終結相または起動相が得られる。(21a) は2フェーズの到達動詞の例で、(21b) は裸名詞句を目的語とする1フェーズの活動動詞、(21c) は数詞のある名詞句を目的とする1フェーズの活動動詞の例である。Klein 流に図式化すると、(22) になる。

- (21) a. 汽車 撞到了 房子。
 Car hit-to Perf house.
 'A car ran into a house.'
 b. 我 昨晚 寫了 信 % (到半夜12點)。
 I last night write Perf {a letter/ letters} (till 12 o'clock) .
 'I wrote {a letter/ letters} (till 12 o'clock last night) .'
 c. 張三 養了 一隻 狗。
 Zhangsan feed Perf.a Cl dog.
 'Zhangsan keeps a dog.'

- (22)a. ---- [----+++++]
- | | | |
|--------|--------|--|
| source | target | |
| 撞 | 到 | |
- b. [+++++] +++++
- | | | |
|---|---|----------------|
| 寫 | 信 | 起点フェーズ :----; |
| | | 目標フェーズ :+++++; |
- c. [+++++]
- | | |
|---|-------|
| 養 | TT[] |
|---|-------|

(21a) は、(22a) に示すように内在的終点を含む達成動詞が2フェーズ述語であり、「了」に具現化されたのは達成動詞の目標フェーズなので、終了の解釈が生じる。(21b) は、(22b) に示すように1フェーズの活動動詞「寫」が「了」によって具現化される場合、必ずしも終了を意味しない。期限を表す修飾要素をつけると、終結の解釈が生じる。さらに、(21c) は (22c) に示すように「養う」は1フェーズ述語であり、唯一のフェーズが際立つフェーズとなる。「了」によって具現化される「養」の活動が具現化され、飼わない状態から飼う状態への状況の変化を伴い、具現化されるのは飼う状態であるので、起動の解釈が生じる。

3.2 経験相標識の「過」

次に経験相標識の「過」について考察する。「過」は起点フェーズも目標フェーズも TT に先行すること、すなわち「今」(TU) に先行する TT よりもさらに以前に事象がすでに終了していることを示す (Klein, 2000)。その結果、事象の繰り返し (resurrection) が可能になる。

- (23)a. 我去過日本兩次。
I go-Exp Japan twice.
'I have been to Japan twice.'
- b. ...-----+++++...-----+++++ [] TU
- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| source | target | source | target |
|--------|--------|--------|--------|

このような事象の繰り返しが可能なのは、中国語の場合、目標フェーズが際立つフェーズなので発話の時点ではすでに起こった事実であり、目標フェーズはもはや「今」に延長しないためである。

一方、[+perfective] に分類された「了」によって標示される事象は繰り返しが不可能である。

- (24)a. 他死了。
He die PERF.
'He is dead.'
- b. ---- [-----+++++]
- | | |
|--------|--------|
| source | target |
| 死んでいない | 死んでいる |

「死」の際立つフェーズは「了₂」によって具現化され、始点はあるが終点は存在しないため、死んでいる状態は現在の時点でも続いている。その結果、「了」の場合、事象の繰り返しが不可能となる。

3.3 継続相標識の「著」

中国語のアスペクト標識で [- perfective] に分類されるのは「著」である。「著」は動作の進行 (on-going progressive) や状態の持続 (stative duration) を表し、非完結性を意味する [+DUR] 素性を有する。動詞レベルに生起するアスペクト標識であるが、中国語の達成動詞・到達動詞は [- DUR]

なので「著」とは共起しない。[+DUR] 素性を有する「著」は意味的に非完了的 (atelic) 動詞を選択し、さらに「著」は動的な動詞と共起し、複合して目的語を選択する。

(25)a. *小明 吃完 著 一個蛋糕。

Xiaoming eat up DUR a Cl cake

Lit. 'Xiaoming is eating up a cake.'

b. *飛機 抵達 著 成田機場。

Airplane arrive-DUR Narita Airport

Lit. 'The airplane is arriving at the Narita Airport.'

(25a) では「著」は終点を有する達成動詞を補部とし、(25b) では瞬時的 (instantaneous) な到達動詞を補部としているため、非文となる。中国語では目標フェーズが際立つフェーズであるため、「著」の共起が非文となる。

これに対して英語では起点フェーズが際立つフェーズであるため、進行相 -ing は達成動詞および到達動詞と共起することができる。

(26)a. John is eating up a watermelon.

b. The airplane is arriving at the Narita Airport.

(26) の例では、(26a) の述語 eat up の際立つフェーズは活動動詞 eat に含まれている起点フェーズである。(26b) の場合、際立つフェーズは起点フェーズであり、まだ到着していない事象の側面にあるので、進行相 -ing との共起は文法的である。

3.4 場所句倒置文

中国語の存在文には場所句倒置文があり、この構文には動作主が生起しない。

(27)a. 牆上掛 {著 / 了} 一幅畫。

Wall-on hung {DUR/ Perf} a Cl picture.

'There is a picture on the wall.'

b. --- [-----+++++] +++

絵を掛ける 絵がかかっている

(27) では「掛」の起点フェーズは「絵を壁に掛ける」動作であり、目標フェーズは絵がかかっている状態である。「了」によって、動作が具現化され、「著」によって絵がかかっている状態の持続が断定される。この事実は Hale and Keyser (1993) の語彙関係構造を仮定することにより説明できる。すなわち動詞レベルのAspect標識は動詞と複合し、動詞の内部にある相述語 [BE AT] に編入するため、文構造では動作主が現れない。それは (28) のようになる。

(28) [[x ACT ON y] CAUSE [yBECOME 著 [y BE AT z 掛]]]

また、(29) に示される Wu (2008) の分析を踏まえ、場所句倒置文は (30) の構造を持つと考える。

(29) [_{TP} [Locative Phrase]_i T [_{vP} t_i v [theme DP] t_i]]

a. 場所句は [Spec, TP] にとどまり、T と一致 (Agree) する。

b. 動詞後に現れる DP は v と一致する。

(30) [_{TP} [床上]_i T [_{vP} t_i 躺 著 [一個病人] t_i]].

[_{TP} [Bed-top]_i T [_{vP} t_i lie DUR [a Cl patient] t_i]]

Lit. 'In bed lies a patient.'

(30) に示すように、場所名詞句は *v*P 内から構造的に高い位置にある主題 (theme) を越え、[Spec, TP] に繰り上がって認可される。

第4章 叙述関係 NP-XP と主要述語の相特性の一致関係

中国語の存在文では、叙述構造 [NP-XP] の述語 XP は随意的に現れるので、付加詞としての述語である。XP が現れる場合、主要述語はアスペクト標識を伴わなければならない。アスペクト標識が義務的であることは、この XP はアスペクト標識によって認可されなければならないことを示している。その認可は Shen (2004) によって提案された相特性の一致関係 (aspectuality agreement) の概念によって説明される。

(31)a. 小紅 相當 高。

Xiaohong quite tall.

'Xiaohong is quite tall.'

b. [_{AspP} [_{vP} *slv* [-d]] [_{VP} Adv 相當 [_{VP} 高]]] Asp ϕ [-d]]

(32)a. 小紅 已經 相當 高 了。

Xiaohong already quite tall PERF.

'Xiaohong has come to be quite tall.'

b. [_{AspP} [_{vP} 已經 [_{vP} *dlv* [+d]] [_{VP} Adv [_{VP} 高]]] Asp 了 [+d]]

本論では、相特性の一致関係が出現動詞の存在文、場所動詞の存在文、および経験を表す存在文にも見られることを主張する。

(33)a. 發生 了一場 事故 很 嚴重。

Happen Perf a Cl accident very serious.

'Here an accident happened, which was very serious.'

b. [_{TP} [_{VP} 發生了 [_{DP} 一場事故 [_{AP} PRO 很嚴重]]]]

(34)a. 床上 躺 {著/了} 一個 病人 在 呻吟。

Bed on lie {DUR/Perf} a Cl patient AT groan

Lit. 'In bed lies a patient groaning.'

b. [_{TP} LocP [_T [_{VP} 躺著 [_{DP} 一個病人 [_{XP} PRO 在呻吟]]]]]

(35)a. 牆上 掛 {著/了} 一幅 畫 很 好看。

Wall-on hang {DUR/Perf} a Cl picture very beautiful.

Lit. '(On) the wall hangs a picture beautiful.'

b. [_{TP} LocP [_T [_{VP} 掛著 [_{DP} 一幅畫 [_{XP} 很好看]]]]]

題－評言]の形式をもち、複合判断(categorical judgment)の叙述様式を有することが示されている。

第3章では、出現動詞存在文、場所動詞存在文、経験存在文について、それぞれの存在文に現れるアスペクト標識の観点から分析している。中国語でアスペクト標識によって標示される事象の側面は目標フェーズ(target phase)であることに基づいて、「了」が動詞と結び付く場合、完了相・終結相・起動相の解釈が得られること、継続相標識「著」が[+DUR]素性をもつ活動動詞を選択すること、また「了」と「著」が動詞レベルのアスペクト標識であるので、場所句倒置文に動作主が現れないことが説明される。さらに、経験を表すアスペクト標識の「過」に標示される事象は、発話の時点まで延長しない完結性をもつものであるため、事象の繰り返しが可能となることが示されている。

第4章では、出現動詞存在文、場所動詞存在文、および経験存在文における主要述語と付加詞二次述語の共起制限が、相特性に関わる素性の一致現象として説明されることが論じられている。

このように、本論文は、中国語の多様な存在文の基本特性を、普遍的概念である相特性および叙述様式によって明らかにすることを通して、個別言語の実証的研究の進展に寄与すると同時に、言語理論の基本概念の検証と精緻化に寄与するものとして評価することができる。

よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。